

# 序

この「グラム染色診療ドリル」は、読み終えた「あなた」が楽になる本です。

目の前の患者さんに対してどの抗菌薬が適切なのか、根拠をもって選ぶことができない。白血球数やCRPが下がらないときに、どうしたらいいのかわからない。グラム染色自体はできるけど、その染色像を判読するのは自信がない。本書は、そんな「あなた」の悩みを解消します。

本書の内容は、習熟段階ごとに3つに分かれています。まず、第1章の基礎知識では、グラム染色手技と顕微鏡の扱いを習得します。スマートフォンでのグラム染色像の撮影法もここで習得できます。次に、第2章の基本編では、ドリルを解いて主要な菌や検体の典型的なグラム染色像が判別可能になります。最後に、第3章の実践編では、症例と診療過程の情報を検討しながら解いていくドリルを通して、グラム染色検査を活用した診断や治療に熟達できるようになります。

ただし、実際の臨床現場で本書が活用できることを最優先したため、一見すると難しく感じる部分もあります。例えば、「黄色ブドウ球菌」などの普及している和名の記載は最小限としました。実際の検査報告書には微生物名が「黄色ブドウ球菌」ではなく「*Staphylococcus aureus*」と記載されているので、そういった記載にも親しみをもって対応できるようになってほしいからです。そのかわり、「*S. aureus*」とはあえて略さなかったり、読み方を付した微生物名一覧を本書の最初に示したりすることで、わかりやすさも担保しています。したがって、いくつかの部分は学問的には正式・正確ではない記載がありますがご容赦ください。

このドリルは、1人で読んでもよし。同僚を誘って勉強会をするのもよし。研修医は指導医を誘って、指導医は研修医を誘って、クイズ形式でも楽しめます。すべての問題には難易度をつけていますので、それも参考にしてもらいたらより楽しめると思います。もしかすると、抗菌薬の適正使用活動にかかわっている臨床検査技師や薬剤師、看護師の方にもオススメできる内容があるかもしれません。

楽になるのは、「あなた」だけではありません。ドリルを解き終えた「あなた」が診療する患者さんも、きっと楽になっているでしょう。きちんとした根拠をもって感染症診療が行われるようになるからです。患者さんが楽になれば、診療する「あなた」はもっと楽になります。さあ、さっそくドリルを始めましょう！

## 謝辞

この本を執筆するにあたり、私を感染症診療の魅力に引き込んでくださった青木 真先生（感染症コンサルタント、サクラ精機株式会社 学術顧問）、感染症診療の研修指導をいただいた本郷 健元 先生（関東労災病院感染症内科部長）と大曲 貴夫 先生（国立国際医療研究センター病院国際感染症センター長）、グラム染色検査の指導をしてくださった金子 心学 先生（元・前橋赤十字病院臨床検査部技師長）、横澤 郁代 先生（元・前橋赤十字病院臨床検査部微生物検査課長）、そしてさまざまなレベルアップの機会を与えてくださった佐竹 幸子 先生（元・特定非営利活動法人EBIC [Evidence-Based Infection Control] 研究会長）、私の研修をサポートしてくれた元同僚の神尾 直 先生（湘南鎌倉総合病院集中治療部長）、いつも検体検査や的確な助言をいただいている前橋赤十字病院臨床検査部微生物検査室の皆さま、本書の方向づけを確認してくれた当科の佐藤 晃雅 先生、グラム染色診療に光をあててくださった羊土社編集部の遠藤 圭介 様、拙稿を丁寧に磨き上げていただいた同編集部の深川 正悟 様、そしてスペースの都合でお名前をすべてあげることができませんがお世話になった方々に、深く御礼を申し上げます。

2021年5月

前橋赤十字病院感染症内科

林 俊誠